

ゾロアスター教における死体悪魔(druxš yā nasuš) について

中別府, 温和

<https://doi.org/10.15017/2328569>

出版情報 : 哲學年報. 44, pp.21-37, 1985-02-27. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ゾロアスター教における死体悪魔 (drušš yā nasuš) について

中別府 温 和

インドのナオサリ (Navsari) に現存するゾロアスター教徒・パーシー (Parsis) は、聖なる火 (Ātaš Bahrām: Ātaš Ādarān: Ātaš Dādghā; Dar-i-Mihr: Āgiāri) と鳥葬の塔 (Daxma) を中心的シンボルとして共有しつつ、これらに関する多くの宗教儀礼を保持している。中でも儀礼的禁忌が強く集中しているのはバラシュヌーム (Barašnōm i nō-šaba; Barašnōm) である。バラシュヌームはアヴェスタ (Avesta; Videvdāt) の中に見い出せる儀礼であり、パーシーはアヴェスタの時代から約千年以上を経てなおこれを維持してきている。この儀礼は、本来は死体悪魔 (drušš yā nasuš) によって不浄にされたゾロアスター教徒が、その不浄を取り除くためのものであった。今日、ゾロアスター教徒・パーシーによって保持されているバラシュヌーム儀礼の具体的内容は、すでに拙稿 (1984) において記述され、(1) 聖火殿に付設してバラシュヌームのための儀礼空間 (Barašnōm-gāh; 約15~20m 四方) が存し、Yaozdaŋragar ('purifier') と呼ばれる祭司二人によって儀礼は行なわれる、(2) アヴェスタの中では穴 (magha) を掘るべきところが、ナオサリでは石によって代用されている、(3) アヴェスタの時代と同様に九夜にわたって行なわれ、この儀礼を受ける人はバラシュヌームのための場所に九日間閉じ込められ、その間食事は他の人々に給仕してもらいつつ食事の時以外は何人とも接触してはならない、(4) バラシュヌームの行なわれる場所は kaš (浅くて線状の細い溝、あるいは砂によってこしらえられた細い線状の畝) で囲まれる、(5) 乾季にのみ行なわれる、(6) 北に直面することが忌避されて、東に直面してこの儀礼を行なう、(7) 不浄を取り

除く手段として、犬 (Sagdid)、聖なる牛 (Varasyoji) の尿 (Nirang)、聖なる水 (Āv)、聖なる火の灰 (Bhasam)、ザクロの木の葉、砂、祈り (Ašəm Vohū; Yaθā Ahū Vairyō; Yeṛhē Hātām; Kām-Nā Mazdā; Srōš Bāj) が存していること、(8)木製の椅子、寝床の使用が禁じられている、(9)飲水以外の目的のために水を用いてはならない、(10)食事は昼間のみ行なう、(11)白色が基調である、(12)ナオサリでは祭司を職業としうる資格を得るために、更に祭司を職業とした後も特定の重要な儀礼 (Paw-mahal) を司式するのに不可欠の条件としてバラシュヌームが行なわれている、(13)平信徒が祭司に依頼して、生きている人や故人のためにこの儀礼を行なってもらう等々が主として取り出された内容であった。本稿はバラシュヌーム儀礼の中核に位置している死体悪魔を主題とする。ゾロアスター教徒の死体悪魔に関する考え方を、死体悪魔について最も古い姿を提供しうるアヴェスタ文献を通して捉え、更に死体悪魔に対抗して行なわれてきたバラシュヌームとの関連において、どのような因子が残存してきているかを観察しようとする。

ところで、ゾロアスター教徒が共有している思考様式の中心的部分の理解に接近しようとするときに、そこに保持されている儀礼の観察・分析へ向うことの意義はどこにありうるだろうか。この点を Émile Durkheim (1968)、Edmund Leach (1964; 1976) の儀礼の本質についての視点に沿って考察する⁽¹⁾。儀礼は集団 (la collectivité) によって担われる一定の行動の様式 (des modes d'action déterminés) であり、集合的性格を持っている。全面的に個人によってのみ行なわれるような行為を儀礼とは称しない。儀礼は集合体を活動 (mouvement) させる。集団が儀礼を行なうために集合し (assemblent)、その場面において個人は接近 (rapprocher) させられ、相互に接触し (contact)、その過程で諸個人は彼らに共通の信念 (les croyances communes)、共通の伝承 (les traditions communes)、大祖先の追憶 (les souvenirs des grands ancêtres) 等の集合的理想 (l'idéal collectif) と交通し、それらを生かし、それらの力を回復させ (refaire)、不断に更新させつつ (régénérer)、自らも意識内容の変容を果たし (le contenu des consciences change)、自己を越えて

高められる (élève)。儀礼以外の場面において、個人の精神の中で最大の場所を占めているのは私的・功利的・物質的利害への関心であり (les préoccupations utilitaires et individuelles. l'intérêt privé.)、そこにおいても集合体の信念、伝承は個人の精神の中で感じられ (senties)、分有されてはいる (partagées)。しかし、そこでは集合的理想の更新・再生産 (rénovation collective) をなしえないのである。個人的・物質的利害を充足させていく生活とは異質の儀礼場面において、集合意識の本質的要素 (les plus essentiels de la conscience collective) の活力は維持され、それが記憶から消えること (s'effacent des mémoires) がくい止められる。したがって儀礼は必要に応じて繰り返えされねばならない。儀礼は傾向として周期的形態 (des formes périodiques; le cycle; saisonnières) をとる。儀礼の反復 (périodicité : cycle) は必然的に社会的時間 (le temps social)、全体的時間 (le temps total) を含み、儀礼が集合的理想の維持、再生産を中心とするので、儀礼には変容しにくい局面がある。この局面は儀礼による物質的表象化、外在化 (material representation; material symbolisation; externalise) によっても強化されている。個人の精神内に生起する感覚的感情 (le sentiment)、感覚的イメージ (sense-images) は個人的 (individuelle)、主観的 (subjective) であるが故に他と交通しにくい内容である。人間の精神はこれらの内容を儀礼によって物質的に外在化 (s'extérioriser sous une forme matérielle) することによって他と交通しうるもの、社会的なものにし、そうすることによって社会的となった概念の相対的永続化 (relative permanence) を行なおうとする。集合表象 (representations collectives) である概念はこのように儀礼を手段として或る対象に固着 (se fixe) させられて、永続的なものにされてきているので、儀礼には古い姿を残存させる局面が含まれている。このように、Durkheim, Leach の視点にしたがえば、儀礼にはそれを保持している集団の集団的理想の本質的部分が集合的に表象され、しかも古い姿の内容がそこにおいて再生産、再確認 (se réaffirme) されている可能性が存しているという点で、儀礼は観察、分析の対象となりうる。今、われわれもこの視点から、ゾロアスター教徒が維持している

儀礼を理解しようとしている。

さて、バラシュヌームには最も強く儀礼的禁忌がかけられているが、強度の禁忌を含む文化領域を考察することは、Durkheim のように禁忌の「消極的 (négatif)」側面に着目するにせよ、Leach のごとく禁忌を「言語によって分類された領域間に位置する中間的で曖昧な領域」と捉えるにせよ、いずれも或る文化がその中に思考の基本的枠として保持しているカテゴリーの分析に接近することである。本稿はゾロアスター教徒が最も強く禁忌をかけている死体悪魔を理解することによって、ゾロアスター教徒の死についての思考様式や事物の分類様式の若干をも考察しようとする。

ここで死体悪魔をアヴェスタ文献 (Vidēvdāt) を通して明らかにしていく。死体悪魔 (druxš yā nasuš) は「死体 (Leiche)」「死骸 (Leichnam)」「死体の一部 (Leichenteil)」(Bartholomae, ch., Altiranisches Wörterbuch. s. 1058) を語源とし、女性の悪魔 (Daēva; Dēv) である。死体悪魔のもつ力、即ち他を病気 (axtay), 不浄 (āhitay), 腐敗 (pavitay) ならしめる力は伝染する (...druxš yā nasuš axtiča pavitiča āhitiča...V. vi. 30, 33, 36, 39; V. vii. 10, 11)。

死体悪魔は「醜悪でマダラのハエのごとき姿」として表象され、北の方角から飛び来る (V. vii. 2)。「鼻, 目, 舌, 顎 (口), 陰部, 尻」から死骸や人, 動物に侵入する (V. ix. 40)。

āaṭ mraoṭ ahurō mazdā : išarə pasčāēta para. iristim spitama zaraθuštra us hača baḏō ayāṭ aēša druš yā nasuš upa. dvaṣaiti apāxiḏraēibyō naēmaēibyō maxši. kəhrpa ərəyāitya frašnaoš apazaḏa rəhō akaranemdriwyā yaḏa zaoḏištāiš xrafstrāiš. (V. vii. 2)

「そこで、アフラ・マズダーは仰せられた。〔人が〕死んだ直後に (išarə pasčāēta para. iristim), スピターマ・ザラスシュトラよ、意識 (baḏō) が〔体の〕外へ出た時に、死体悪魔 (druš yā nasuš) は北の方から飛んで来る。

怖しいハエの形をして (maxši. kəhrpa), 膝を前につき出して (frašnaoš),
尻を高くつき出して (apazaða rəhō), いたるところに斑点をつけて
(akaranemdriwya), 身の毛もよだつ害悪な生きもの (zaoždištāiš xrafstrāis)
のように〔北の方から飛んで来る〕。」

yeziča aēšō nā yō yaoždāθryō pača aēibyō nmānaeibyō ūbišto axšnūtō
parāiti apa hē paskāt̄ fraoirisyēite spitama zaraθuštra aēša druxs̄ yā nasuš̄
nānhanat̄ hača čašmanat̄ hača hizumat̄ hača paitiš. qarənāt̄ fravāxšaŋt̄ hača
frašumakat̄ hača. (V. ix. 40)

「もし、浄めの儀礼を行なう人 (yaoždāθryō) が、かれらの家から、心を傷
つけられて (ūbišto), 心を満たされることなく (axšnūtō) 去り行くならば、
死体悪魔 (druxs̄ yā nasuš̄) はかれに後から追いつき (apa he paskāt̄), ス
ピターマ・ザラスシュトラよ、鼻から、目から、舌から、顎 (あるいは口,
paitiš. qarənāt̄) から、陰部から、肛門から [かれの体の中に] 入り進み行く
(fraoirisyēite)。」

死体悪魔は死んだ人には全てに取りつく、その際取りつかれる側の人に
じて死体悪魔の及ぼす影響の度合いは異なっている。祭司、戦士、農夫の順に
死体悪魔の影響の度合いは強く、これらの人に次いで犬が来る (V. v. 28, 29.)。
しかるに、異宗徒の死体悪魔が他を不浄ならしめる度合いは、一年を経過して
乾燥したカエルの死体悪魔以上のことはないという (V. v. 35, 36)。乾燥して
いる死骸や一年を過ぎた死骸はもはや死体悪魔の影響を他に及ぼすことはない
と考えられているので、異宗徒の死骸には実質的には死体悪魔は取りつかない
と理解することが可能であろう。

āat̄ mraoŋt̄ ahurō mazdā : yezi aθhaŋt̄ āθrava frā zi dvasaiti spitama
zaraθuštra aēša druxs̄ yā nasuš̄ yezi aēvandasēm frāšnaoiti dasēmēm paiti.

raēḡwayeiti. āaṭ yezi a rəhaṭ raḡaēštā frā zī dṡasaiti spitama zaraḡuštra aēša druḡš yā nasuš yezi dasəməm frāšnaoiti nāuməm paiti. raēḡwayeiti : āaṭ yezi a rəhaṭ vāstryō fšuyāš frā zī dṡasaiti spitama zaraḡuštra aēša druḡš yā nasuš yezi nāuməm frāšnaoiti astəmən paiti. raēḡwayeiti. (V. v. 28)

「そこで、アフラ・マズダーは仰せられた。もし、死んだものが祭司(āḡrava)であったならば、事実、そのものの死体悪魔(druḡš yā nasuš)は飛び来って(frā dṡasaiti)、スピターマ・ザラスシュトラよ、11人目まで進み行きて(frāšnaoiti)、10人を間接に汚す(paiti. raēḡwayeiti)。もし、死んだものが戦士(raḡaēštā)であったならば、事実、そのものの死体悪魔は飛び来って、スピターマ・ザラスシュトラよ、10人目まで進み行きて、9人を間接に汚す。もし、死んだものが家畜を肥やす農耕民(vāstryō fšuyāš)であったならば、事実、そのものの死体悪魔は飛び来って、スピターマ・ザラスシュトラよ、9人目まで進み行きて、8人を間接に汚す。」

āaṭ yezi a rəhat spā pasuš. haurvō frā zī dṡasaiti spitama zaraḡuštra aēša druḡš yā nasuš yezi aštəməm frāšnaoiti haptaḡəm paiti. raēḡwayeiti. āaṭ yezi a rəhaṭ spā viš. haurvō frā zī dṡasaiti spitama zaraḡuštra aēša druḡš yā nasuš yezi haptaḡəm frāšnaoiti xštūm paiti. raēḡwayeiti. (V. v. 29)

「もし、死んだものが牧羊犬(spā pasuš. haurvō)であったならば、事実、そのものの死体悪魔は飛び来って、スピターマ・ザラスシュトラよ、8人目まで進み行きて、7人を間接に汚す。もし、死んだものが番犬(spā viš. haurvō)であったならば、事実、そのものの死体悪魔は飛び来って、スピターマ・ザラスシュトラよ、7人目まで進み行きて、6人を間接に汚す。」

dātarə. āaṭ yezi a rəhaṭ mairyō drvā bizangrō avaḡa ašəmaoyō anašava čvaṭ spəntahe mainyēus dāmanam ḡəm. raēḡwayeiti čvaṭ paiti. raēḡwayeiti.

(V. v. 35)

「物質世界の創造者〔アフラ・マズダー〕よ、もし、死んだものが邪悪で (mairyō), ドゥルグのように悪意に満ちた二本足の悪人 (drvā⁽⁴⁾ bizangrō), 正しく信仰をしない異宗徒のような人 (avaθa ašēmaoγō⁽⁵⁾ anašava) であったならば、どの程度スプンタ・マンユ (spēntahe mainyēus⁽⁶⁾) の被造物 (dāmanam) を直接に汚すのですか (ḥam. raēθwayeiti), どの程度〔スプンタ・マンユの被造物を〕間接に汚すのですか。」

āaṭ mraoṭ ahurō mazdā : yaθa vazayačiṭ viš. huškō tarō yārē mərətō. jvō zi spitama zaraθuštra mairyō drvā bizangrō avaθa ašēmaoγō anašava spēntahe mainyēus dāmanam ḥam. raēθwayeiti jvō paiti. raēθwayeiti. (V. v. 36)

「そこで、アフラ・マズダーは仰せられた。死んで一年を過ぎて、乾らびたカエルと同じである (yaθa vazayačiṭ viš. huškō tarō yārē mərətō)。事実、生きているかぎり (jvō), スピターマ・ザラスシュトラよ、邪悪で、ドゥルグのように悪意に満ちた二本足の悪人 (mairyō drvā bizangrō), 正しく信仰をしない異宗徒のような人 (avaθa ašēmaoγō anašava) は、スプンタ・マンユ (spēntahe) の被造物 (dāmanam) を直接に汚す (ḥam. raēθwayeiti), 生きているかぎり〔スプンタ・マンユの被造物を〕間接に汚す (paiti. raēθwayeiti)。」

動物に襲われて死んだり、他人から殺されたり、不慮の事故によって死を迎えた場合には、死体悪魔はその人の死後に来る最初のガー (Gāh; asnyehe pasčāēta anyehe raθwō aēš druxs̄ yā nasuš upa. dvṣasaiti...; ゾロアスター教は太陽の運行、日の出、日の入り、真昼、真夜中を軸として一日を五つの刻限に分類し、これに沿って儀礼、祈りを行なっている) に死骸に取りつく。(V. vii. 5) その他の死の場合には死後直ちに死骸に取りつく (V. vii. 2)。死骸の特定の場所に特に強く或いは弱くつくという記述はない。

死骸に取りついている死体悪魔は犬が死骸を見るか (Sagdīd, 'seen by the dog'), あるいは犬が死体を食うか, あるいは死骸を啄む鳥が死骸の方へ向って飛び来ると北の方へ去るといふ (V. vii. 2)。他の道と別してもうけられている鳥葬の塔への道を行く葬列は犬によって導かれねばならない (V. viii. 18)。

spānēm zairitēm čaθru. čašmēm spaētēm zairi. gaošēm āθritim taða aētā paθā vivādayantu aiwi. nitičīṭ spitama zaraθuštra spānēm zairitēm čaθru. čašmēm spaētēm zairi. gaošēm aēša druxš yā nasuš apa. dvṣasaiti apāxtaraēibyō naēmaēbyō maxši. kəhrpa əθəyaitya frašnaoš apazaṭaṛhō akaranēm driwyā yaθa zaoždištāiš xrafstrāiš. (V. viii. 16)

「黄色で四つ目の犬 (spānēm zairitēm čaθru. čašmēm) か, 白色で耳が黄色の犬 (spaētēm zairi. gaošēm) を引いて, 三たび, この〔死骸が運ばれた〕道を行き来せよ (vivādayantu), 黄色で四つ目の犬か, 白色で耳が黄色の犬を連れて行き来することによって (aiwi. nitičīṭ), スピターマ・ザラスシュトラよ, かの死体悪魔 (druxš yā nasuš) は北の方へ飛んで行く (apa. dvṣasaiti), 怖しいハエの形をして (maxši. kəhrpa əθəyaitya), 膝を前につき出して (frašnaoš), 尻を高くつき出して (apazaṭaṛhō), いたるところに斑点をつけて (akaranēm driwyā), 身の毛もよだつ害悪な生きもの (zaoždištāiš xrafstrāiš) のように〔北の方へ飛んで行く〕。」

死骸に取りついた死体悪魔はいつまで死骸に留まるかについて明確な記述はないが, 乾燥してしまっている死骸に接触しても死体悪魔の影響を受けない (V. viii. 33, 34) という形でその力は限定されている。⁽⁸⁾

dātaraθ gaēθanām astvaitinēm ašāum kaṭ tā nara yaoždayan aṛhən ahura mazda yā nasāum ava. hištāt huskanām tarō yārə mərətanām. (V. viii. 33)

「物質世界の創造者〔アフラ・マズダー〕よ、いつ、このような人は浄めることができるのですか (yaoždayan), アフラ・マズダーよ、死んで一年を過ぎ、乾らびている死骸 (nasāum...huskanam tarō yārē mərətanam) の傍に立っている (ava. hištāt) 人〔は浄めることができるのですか〕。」

āaṭ mraoṭ ahurō mazdā : yaoždayan a rəhən ašāum zaraθuštra. nōiṭ hisku hiskvāi sraēšyeiti. ... (V. viii. 34)

「そこで、アフラ・マズダーは仰せられた。浄めることができる (yaoždayan a rəhən), ザラス・シュトラよ。乾いているもの (hisku) は乾いているもの (hiskvāi) に付着しない (nōiṭ...sraēšyeiti)」

死体悪魔によって不浄ならしめられているものに接触した人や物は、不浄の度合いに応じて、それぞれ特定の回数、牛の尿 (Gōmēz) で洗うか (V. vii. 10—15 衣服; V. vii. 73—75 食器)⁽⁹⁾, 水で洗う (V. vii. 28—31 薪; V. vii. 32—35 穀物)⁽¹⁰⁾ ことを通して不浄を取り除かねばならない。

死体悪魔に対抗し、これを排除する手段として他に祈りがある。その主なものは、アフナ・ワルヤ (Yaθā Ahū Vairyō), アシュム・ウォフー (Ašəm Vohū) イェンヘー・ハーターム (Ye rəhe Hātām)⁽¹²⁾ である。

yaθā ahū vairyō aθā ratuš ašāčīṭ hačā va rəhōuš dazdā manarəhō šyaoθananam a rəhōuš mazdāi xšaθrəmčā ahurāi ā yim drəgubyō dadaṭ vāstārəm. (Y. xxvii. 13)

「〔人たちに〕望まれたる主 (ahū)〔アフラ・マズダー〕のように、そのように〔ザラス・シュトラは〕⁽¹³⁾ 裁き人 (ratuš) として、天則 (aša) にしたがって、善きころざし (va rəhōuš manarəhō) によってなされた、この世での行ない (šyaoθananam a rəhōuš) をマズダーのもとに持ち来たらし (dazdā), 王国 (xšaθrəmčā) をアフラのもとに持ち来たらす、〔このザラス・シュトラを〕かれらは、貧しき人たちの牧羊者 (drəgubyō dadaṭ) となった。」

ašəm vohū vahištəm asti uštā ahmāi hyaṭ ašāi vahištāi ašəm. (Y. xxvii. 14)

「天則⁽⁶⁴⁾ (ašəm) は善きもの (vohū), 最も善きもの (vahištəm)。欲するままに (uštā), 天則はあり, 欲するままに, われわれのために (ahmāi) 天則はある。天則は最も善き天則 (vahištāi) のために [ありますように]。」

yeṛəhē hātəm āṭ yesnē paiti vaṛəhō mazdā ahurō vaēṭā ašāṭ hačā yāṛəḥamčā ṭašcā tāscā yazamaidē. (Y. xxvii. 15)

「この世にあるもののうちで (yeṛəhe hātəm), どの男たちが祈りや供物を捧げられるべき (yesnē) よりよき人であるかを, マズダー・アフらは, 天則 (ašāṭ) にしたがってご存じです, どの女たちが祈りや供物を捧げられるべきよりよき人であるかをも [マズダー・アフらは, 天則にしたがってご存じです]。そのような男たちや女たちを, われわれは崇める (yazamaidē) ものなのです。」

死体悪魔を取り除かざる人々は大地に死骸, 悪魔 (Daēvas), 害悪な生きもの (xrafstras) を生ぜしめ, その害悪なる生きものは穀物を食い, 衣類をも食う (V. xvii. 3)。

āat āhva vyarəṭāhva zəmə daēva ḥəm. bavainti āṭ āhva vyarəṭāhva zəmə xrafstra ḥəm. bavainti yim mašyāka spiš ṇama aojaite yim mašyāka yaom yavōhva nižgaṛəhēnti vastra vastrāhva. (V. xvii. 3)

「そこで, この汚された正しからざる大地 (vyarəṭāhva zəmə) に, 悪魔 (daēva) が群れ集まり (ḥəm. bavainti), そこで, この汚された正しからざる大地に, 害悪な生きもの (xrafstra) が群れ集まり, 人がシラミ (spiš) と呼

ぶ害悪な生きものが〔群れ集まり〕、人の穀倉の穀物 (yaom yavōhva) を食い尽くし (nižgarəhēnti), 箆筒の衣服 (vastra vastrāhva) を食い尽くす害悪な生きものが〔群れ集まる〕。」

しかし、死骸を水あるいは火の中へ入れる人は永遠に死体悪魔の影響から逃れることはできない。かかる人はクモ、バッタを増大させ、草を絶やす旱魃を増大させ (V. vii. 26), 冬の力を増大させ、深く雪を降らせ、家畜を殺す人である (V. vii. 27)。また、土、木、粘土で作られた道具も死骸に接触した場合には、永遠に死体悪魔の影響から逃れえない (V. vii. 75)。死骸を食した人もこれに同じである (V. vii. 23—24)。

āaṭ mraoṭ ahurō mazdā : ayaoždayan aəhəm ašāum zaraθuštra. te sūnō madaxayāāca aogazdastēma bavainti yōi nasu.kərəta drvantō te haēčənhō avāstrahe aogazdastēma bavainti yōi nasu.kərəta drvantō. (V. vii. 26)

「そこで、アフラ・マズダーが仰せられた。汚されたもの (ayaoždayan) になるであろう、ザラス・シュトラよ、〔死骸を水あるいは火の近くに持ち来る人は〕。〔そのように〕死体を扱う邪悪な人 (nasu.kərəta drvantō) は、バッタやクモ〔のような害悪な生きもの〕に最も強い力を与える人 (aogazdastēma bavainti) であり、〔そのように〕死体を扱う邪悪な人は、草の育ちを妨げる旱魃 (haēčənhō avāstrahe) に最も強い力を与える人である。」

te zimō daēvō.dātahe gaojanō jaiwi.vafrahe upa.srvatō xrūtahe aṇavatō diždāəhahe aogazdastēma bavainti yōi nasu.kərəta drvantō. te aēšam paiti sraoe aēša drušš yā rasuš upa.dvašaiti. ayaoždya pasčaēta bavainti yavaēča yavaētātaēča. (V. vii. 27)

「〔そのように〕死体を扱う邪悪な人(nasu.kərəta drvantō) は、悪魔によっ

て作られた冬 (zəmō daēvō.dātahe), 牛を殺し (gaojanō), 深い雪を降らす (jaiwi.vafrahe), ゆっくり這って歩きまわる (upa.srvatō), 残酷な (xrūtahe), 危険に満ちている (aṃavatō), 劣悪な (diždāṃhahe) 冬に, 最も強い力を与える人 (aogazdastəma bavainti) である。死体悪魔 (druxš yā nasuš) は, そのような人のツメ (sraoe) のところまで飛びつく (upa.dvəšaiti)。〔その人は〕それから後, 永遠に, 永遠に (yavaēča yavaētātaēča) 浄められなくなる (ayaoždya bavainti)。〕

Gōspand (「牛 (Rind)」 「牡牛 (Stier; Kuh)」 Air. Wb. s. 506; 'beneficent bull' 「恵み深き牛」 Av. gav-spənta-) の肉には死体悪魔は取りつかない。人あるいは犬の死骸を食した牡牛は一年を経て死体悪魔の不浄から離脱しうるといふ (V. vii. 76—77)。ゾロアスター教徒の牛に対するエコロジカルな局面からの関心の高さを示していると言えよう。

dātarə gaēṃaṇam astvaitiṇam ašāum kaṭ tā gēuš yaoždayaṇ aṃhən ašāum ahura mazda yā nasāum fraṃharāt sūnō vā para.irištahe mašyehe vā. (V. vii. 76)

「物質世界の創造者〔アフラ・マズダー〕よ, いつ, このような恵み深き, 有益な生きもの (gēuš) は浄められることができるのですか (yaoždayaṇ aṃhən), アフラ・マズダーよ, 死んだ犬 (sūnō para.irištahe) あるいは死んだ人 (para.irištahe mašyehe) の死骸を食べた (nasāum fraṃharāt) 恵み深き, 有益な生きもの〔は浄められることができるのですか。〕

āaṭ mraoṭ ahurō mazdā : yaoždayaṇ aṃhən ašāum zaraṃuštra. nōiṭ payō. fšuta zaoṃre nōiṭ gēuš zaoṃre barəsmaine paiti. baire antarāt naēmāt yārə. drājō āaṭ pasča yārə. drājō vasō garəṃā aṃhən nərəbyō aša. vabyō hamaṃa yaṃa paračiṭ. (V. vii. 77)

「そこで、アフラ・マズダーは仰せられた。淨めることができる (yaoždayan a rəhən), ザラス・シュトラよ。〔その恵み深き, 有益な生きものの〕乳と乳脂 (payō. fšuta) を供物 (zaoθre) に用いることのないように, 〔その恵み深き, 有益な生きものの〕肉 (gēuš) を供物やバラスマの聖なる枝 (barəsmaine) 〔を使用する儀礼〕のために用いることのないように, 〔恵み深き, 有益な生きものが, 死んだ犬や人の死骸を食べて後〕一年間の間は。一年を過ぎて後には, 〔その乳や肉は〕自由に, 正しい人々 (nərəbyō aša. vabyō) のための食べもの (garəθā) になりうる, 正しくそれ以前と同じように (hamaθa yaθa paračit̄)。」

これまで記述した内容に限定して, いくつかの問題点を取り上げて行く。ゾロアスター教徒は死体悪魔に病気, 不浄, 腐敗の原因を求め, イナゴ, クモ等の害悪なる生きもの, 旱魃, 冬の力, 雪の増大を含む社会的危険や不幸を生起せしめるものとして捉えている。このような社会的危険や不幸の原因から逃れたり, これを排除するためにいかなる手段がとられているかという局面は Evans-Pritchard (1956. p. 315) も指摘するように, その文化の 'dominant motif' であり, このモチーフは他の信念を支配し, 全体に形態 (form), 型 (pattern), 色調 (color) を付与している。

死体悪魔は死骸に取りつくという形で表象されているが, これが取りつく対象によってその影響の度合いが異なり, その度合いはゾロアスター教内における社会階層 (祭司, 戦士, 農夫) の相違に対応し, 他方ではゾロアスター教徒と異宗徒の区別をも画する。更に, 死体悪魔が対象に取りつく時によって, 不慮の死とその他の死が分類されている。

さて, 危険や不幸の原因である死体悪魔から逃れるために, あるいはこの原因を排除するためにいかなる手段がとられていたか。犬と, 死骸を啄む鳥は死体悪魔を北へ追い払う存在であり, 牛の尿, 水はこれを取り除く手段である。牛の肉には死体悪魔は取りつかない。乾燥した死骸はもはや死体悪魔の影響を受けない。水と火へ死骸を入れる人は永遠に死体悪魔の影響から逃れえない。死体悪魔との関連において, 犬, 死骸を啄む鳥, 牛の尿, 水, (牡)牛, 火,

乾燥等の因子に積極的価値づけがなされている。

死体悪魔はハエの形をしていて北から来て北へ帰る。死体悪魔を取り除かざる人は、冬の力、雪、イナゴ、クモを増大させる。土、木、粘土で作られた道具へ取りついた死体悪魔は永遠に取り除けない。北、冬の力、雪、イナゴ、クモ、土、木、粘土で作られた道具等の因子は死体悪魔との関連においては消極的価値づけがされている。

ここで取り出された諸因子と本稿の最初の部分において提示された、ナオサリにおけるバラシュヌーム儀礼の具体的内容の骨子との比較を行なうと、そこに儀礼空間、儀礼の行なわれる期間、これを行なう祭司の役割等に関してだけでなく、北の忌避、木製の道具を使用することの禁止、不浄を取り除くための手段としての犬、牛の尿、水、砂の使用、そこで唱えられるべき祈りの内容、乾季の優先などのバラシュヌームの本質的構成要素の古い姿が死体悪魔についてのゾロアスター教徒の思考様式の中で残存している様態が観察される。

註

- (1) 宗教儀礼は宗教現象における具体的行動場面であると同時に、その宗教儀礼を共有する集団が保持している意味を媒介させる手段となりうる。Émile Durkheim に従えば、一定の行動様式 (*des modes d'action déterminés*) である儀礼は、それが向う対象の特質 (*la nature spéciale de leur objet*) によって他の行動から区別 (*distingués*) される。儀礼の対象の特別な性質は信念 (*la croyance*) の中に表現されている (*exprimée*)。それ故に、信念を決定 (*définir*) した後に儀礼の決定へと向わねばならない。

ところで、宗教的信念は人々が表象する事象を相互に対立し (*opposés*)、絶対的に異質 (*hétérogénéité*) である二つのカテゴリーに分類する性質を示す。この対立や異質性は宗教により様式が異なるが、二つのカテゴリーの対立、対照 (*contraste*)、異質性は二つのカテゴリー-或は各々のカテゴリー-に属する事物間の接触 (*contact*) や混同 (*mélanges*) を人々の精神が拒否することを通して保たれる。かかる精神的態度は、具体的な徴によって外部へ表出される (*se traduire au dehors par un signe visible*)。そして、集散的に表象されている。Durkheim の消極的儀礼 (*le culte négatif*)、即ち、若干の行動様式の禁止 (*interdits*) を中核とする儀礼の向う目的はここに存する (pp. 49—58)。

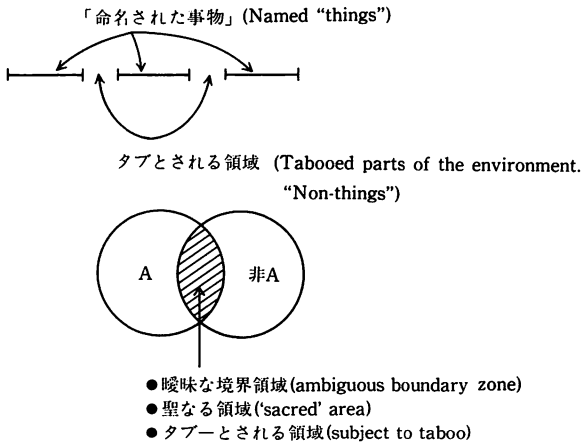
'Anthropological aspects of language : animal categories and verbal abuse', in E. H. Lenneberg (ed.), *New Directions in the Study of Language* (Mass.) : MIT Press, 1964.

「言語の人類学的側面——動物のカテゴリーと侮蔑語について」諏訪部仁訳 (『現代思想』4-3, 青土社, 1976).

Culture and Communication : The logic by which symbols are connected. An introduction to the use of structuralist analysis in social anthropology. Cambridge University Press, 1976.

『文化とコミュニケーション』青木保・宮坂敬造訳, 紀伊國屋書店, 1981.

これらの著作の中でタブーとされる領域を以下のごとく図示している。



日常的で (normal), 時間に限定され (time-bound), 明確に区切られ (clear-cut), 中心的で (central), 俗的である (secular) 社会的空間・時間 (social space-time) からなる二つの領域を区切る (separate) 境界領域において, 現実に境界として役立つ空間的・時間的標識 (spatial and temporal markers) それ自体は, 非日常的で (abnormal), 無時間的で (timeless), 曖昧で (ambiguous), 周縁的で (at the edge), 聖なるもの (sacred) と位置づけられている (op.cit., p. 35)

(2) 時間, 空間, 類, 数, 原因, 実体, 人格性等のカテゴリーは, これ自体, 概念 (concept) であり, 集合体 (la collectivité) の作品である。カテゴリーは全て既に作られた形で (toute faite) 吾々に与えられている。これは安定性 (stabilité) と非人格性 (impersonnalité) を特質とする堅い枠 (les cadres solides) であり, 諸精神が相互に理解し合えるための基本的条件 (les conditions fondamentales de l'entente entre les esprits. p. 627) であり, 全ての精神が出会う共同地である (elles sont le lieu com-

mun où se rencontrent tous les esprits. p. 19)。

カテゴリーは社会から来ているだけでなく、カテゴリーが表現する (expriment) 事物それ自体が社会的である。カテゴリーを制度化 (instituées) したのが社会に他ならないだけでなく、カテゴリーの内容 (contenu) として役立つのは社会的存在 (être social) の種々の側面に他ならない。……時間のカテゴリーの基底に存するのは社会生活のリズムである。空間のカテゴリーの素材 (matière) を提供したのは社会によって占有された (occupé) 空間である。因果律 (causalité) のカテゴリーの本質的要素、即ち有効な力の概念 (concept du force efficace) の原型は集合力 (la force collective) である (p. 628)。

カテゴリーとは思考のための精巧な道具 (savants instruments de pensée) のようなもので、人間の集団が何世紀も経る過程で骨を折って鍛えて作り上げ、そのカテゴリーの中に人々の知的資本 (capital intellectuel) の最良の部分を蓄積してきた。人類史の一部は残らずこのカテゴリーの中に圧縮 (résumée) された形で存している (p. 27)。

- (3) Bartholomae, ch. Air. Wb. s. 538 では「野生の動物 (wildes Tier)」「猛獣 (Raubtier)」と説明されている。Mary Boyce はこれを 'noxious creatures' pp. 298—300 と訳している。具体的には、ハチ、カイコ、ネコ、ライオン、アリ、カエル、ハエ、ヘビ、サソリ、イナゴ、クモ等が含まれる。祭司が Xrafstragan ('Xrafstrakiller' Mary Boyce, p. 298) と称されるのは興味深い。反対に、ニワトリ、イヌ、ウシ、ヒツジ、ヤギは恵み深き生きものと考えられている。
- (4) drug は女魔である。aša (天則) に対立するもので、「虚偽 (Lüge)」「詐欺 (Trug)」(Air. Wb. s. 778) の意味が与えられている。
- (5) 「異宗を希教する人 (Verbreiter ketzerischer Lehre)」「邪教を唱える人 (Irrlehrer)」(Air. Wb. s. 258)。「天則 (aša) を欺く人 (deceiver of aša)」(Mary Boyce, p. 301)。
- (6) ガーサー (Gāthās) においてはアフラ・マズダーの創造の力であり、アフラ・マズダーの創造の力を実体化する聖霊 (yazata) でもある。
- (7) 犬あるいは人が死んだ土地は一年の間汚れる。マズダーを信仰する人は、一年間この土地に種をまいたり、水を注いだりしてはならない。この禁を犯す人はプシュータヌ (pašō. tanū) 罪に相当し、答で200回叩かれる (V. vi. 1—5)。
- (8) 死体悪魔が取りついた対象から逃げる場合は、両眉の間、後頭、顔の前面、右の耳、左の耳、右の肩、左の肩、右の腋窩、左の腋窩、首、背中、右の乳、左の乳、右の助骨、左の助骨、右の臀部、左の臀部、陰部、右太股、左太股、右膝、左膝、右腓、左腓、右踝、左踝、右足の前面、左足の前面、(右)足の裏、左足の裏、右足の爪先、左足の爪先の順に逃げる (V. viii. 40—72)。
- (9) 金製の食器の場合、牛の尿で一度、土で一度、水で一度洗えば汚れは浄められう

る。以下の食器についても牛の尿、土、水を使用して洗わねばならないが、今その項目と回数を示すと、銀製（二度）、真鍮製（三度）、鉄製（四度）、石製（六度）のごとくである（V. vii. 73—75）。

(10) 薪が乾いている場合には、〔汚れた〕薪をヴィータスタイ (vitastay : 親指——小指の長さ) 間隔に地上に並べて置き、それらに水をふりかける。薪が湿っている場合には、同様にフラーラートナイ (frārašnay : 前腕の長さ) 間隔に地上に並べて置いて後、水をふりかける（死体悪魔が犬或いは死体をついばむ鳥によって薪から追い出されていない時）。薪から死体悪魔が犬や鳥によって追い出されている時には、乾いた薪をフラーラートナイの間隔に、湿っている薪をフラーバザウ (frabāzav : 首——指の先端の長さ) 間隔に地上に並べて置いて後、水をふりかける（V. vii. 28—31）。

(11) 穀物から犬や鳥によって死体悪魔が追い出されていない時は、穀物が乾いている場合はそれらをフラーラートナイの間隔に、穀物が湿っている場合はそれらをフラーバザウの間隔に地上に並べて後、水をふりかける。穀物から犬や鳥によって死体悪魔が追い出されている時は、乾いている穀物はフラーバザウの間隔に、湿っている穀物はヴィバーザウ (vibāzav : 二腕を広げた長さ) の間隔に地上に並べて置いた後、水をふりかける（V. vii. 32—35）。

(12) これらの祈りの他に Kām-nā Mazdā も唱えられる。

「どなたを、おおマズダーよ、私のようなもののために守護者 (payūm) と定めてくださったのですか、悪を行なうもの (drəgvā) が私をとらえて害を加えようとしているときに、マズダーの火 (āšrasča) と善きころざしの他に——マズダーの火と善きころざしの働きによって、天則はより優れたものになっていくのですが——〔どなたを、私のようなもののために守護者と定めてくださったのですか〕。この教えを私の良心 (Daēnā) に説いて下さい。」

(13) 『世界古典文学全集』3巻、伊藤義教、筑摩書房 昭和42年 p. 368 参照。

‘A History of Zoroastrianism’ Mary Boyce, Leiden/Köln E. J. Brill, 1975. p. 260 参照。

‘Avesta Reader’ Hans Reichelt, Strasburg, 1968. p. 173 参照。

‘Zand-i Khūrtak Avistāk’ Ervad B. N. Dhabhar, Bombay, 1963. p. 2 参照。

(14) 伊藤義教 前掲書 p. 368参照。